西ヨーロッパの旅から

荒牧　富美江

昨年と同じようなスケジュールで、夏休みに西欧をまわった。ことしはオランダのCATV事情調査と、ロンドンの芝居を観る旅である。期間は八月末から約二週間の日程で、ヨーロッパはもう秋であった。

昨年訪ねたベルギーはヨーロッパ随一のCATV（有線テレビ）の普及国で、総世帯数三七二万のうち三一〇万世帯が加入、普及率八三％（一九八六年末）の高率であったが、オランダはベルギーにつぐ都市型CATVの先進国である。面積四万八〇〇平方キロ余、九州よりやや狭いくらいの国土に人口約一千四〇〇万、総世帯数五五〇万、加入世帯三一〇万で、対世帯普及率は五六％（同年末）である。半世紀以上も前、ラジオ放送が開始されたころ、国境を接する西欧の国々が、電波の混線を防ぐために有線放送を採用したという歴史を考えれば、この地方のケーブル網の発達も不思議ではない。西欧の都市の場合、すでに電線その他を納める地下ケーブルが整備されていることが、CATVの普及を容易にしているという。

アムステルダム市のCATVケーブル網の普及は西欧最大級といわれるもので、その運営には、KABELTELEVISIE AMSTERDAM B. V.（KTA）があたっている。KTAは一九七七年創立、株式会社組織で、市が五〇％、住宅公団が四八％の株を持つ施設である。現在、アムステルダムのCATV普及率は七五％、チャンネル数は一五。オランダ放送連盟（NOS）の二チャンネルのほか、西ドイツ・ベルギー・フランス・イギリス・ルクセンブルグ諸国の公共テレビの再送信に加えて、「スカイチャンネル（英）」「スーパーチャンネル（英）」など、民間企業制作の番組もネットされている。但し、これらの娯楽番組はオランダ語の字幕や吹き替えを入れることは許可されていない。その理由は、この地方では英・独・仏・オランダ語での交流があり、言葉はそれほど障害にならないことと、自国の放送の保護という意味もあるようだ。国内には、現在八つの放送団体があり、それぞれが独自に特色のある番組を制作して、政府から放送時間の割り当てを受けて交互に放送している。こうしたオランダの放送制度自体も非常に興味深い。

現在、アムステルダムでは自国のチャンネルもアンテナでは見ることができなくなっているため、ケーブル網は市の周辺までカバーしている。KTAの経営状態も良好で、月一四・七ギルダー（約千円）の料金の引下げも近く可能となり、八八年末には一八チャンネル、普及率九〇％に達すると予想され、九〇年以降は、ニューメディアを導入し、テレビバンキング、ショッピングのサービスも実施されるだろうという。

さて、アムステルダム滞在は三泊四日、パリ二泊で残る九日がロンドンである。ことしも古典劇三つにミュージカル三つを観ること

ができた。

ロンドンの劇場案内の八月後半版を昨年の夏のと比較してみると、RSCのようなレパートリー・システムの六劇場を除いて、主な劇場三九のうち三割がロングランである。アガサ・クリスティの「ねずみとり」は三五年目に入っているし、昨年観たニール・サイモンの「思い出のブライトン・ビーチ」も、ミュージカル「ミイ&マイガール」も「レ・ミゼラブル」も、また「キャッツ」もまだ上演されている。とくにミュージカル一四劇場のうち七劇場がロングランものなのは、最近イギリスのミュージカルの評価が高まっている証拠だろうか。この分では二、三年通ったらロンドンのミュージカルはあらかた観てしまうことになるかもしれない。

古典劇はシェイクスピアを二つ、「真夏の夜の夢」と「リヤ王」である。

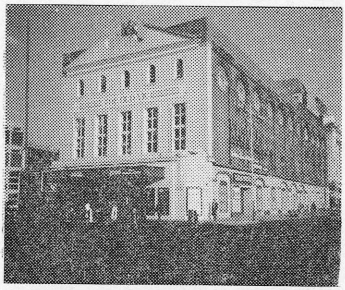
「真夏の夜の夢」は、昨年の夏ストラトフォード・アポン・エイボンで、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（RSC）が上演していた。ことしは、RSCのロンドンの本拠バービカンでの上演である。バービカン劇場はまだ新しい、一五〇〇席くらいのオープン・シアターである。夏休みのマチネーのせいか、劇場全体がなごやかな雰囲気で、小学生くらいの子ども達が二割近くもまじっていたのには驚いた。子ども向けの芝居だったかと、ファンタスティックな表紙のプログラムを見なおしたほどである。舞台は、日本でも上演されたピーター・ブルックの「真夏の夜の夢」ほど奇抜でもなく、いわゆる古典劇風でもない。子ども達は開幕中も幕間も変りなく静粛であった。こうして、常に新しい観客がつぎつぎと創られていくのだろうか。どの芝居も、ミュージカルも、観客は老若男女にわたり、日本のように観客層が偏っている感じはない。歌舞伎教室などを観る中・高校生たちのあの凄まじい騒音を思いあわせて、何が違うのかと考えさせられてしまった。

「リヤ王」は、ナショナル・シアター（NT）の大劇場オリヴィエだった。この劇場もまだ新しいオープン・シアターで、観客席は一五〇〇くらいだろうか。舞台は天井から大きな垂れ幕が二枚下っているだけで、その幕を絞り上げたり、照明をあてたりで場面の変化を暗示していた。回り舞台もセリもなさそうで、終りに近い戦闘場面ではかなり大きな戦車が登場した。衣装は古典劇風ではあったが、あっさりしたものだった。週末の『サンデー・タイムズ』の短評は、リア王を演じた役者アンソニー・ホプキンスを褒めていた。老人の哀しさをしみじみと表現していたのが印象に残る。休憩を入れて三時間の舞台も、スピーディな運びで疲れは感じなかった。

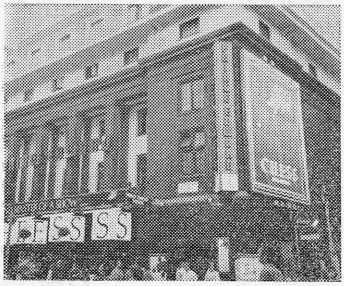
もう一つの古典劇は、ベン・ジョンソンの「Everyman In His Humour」で、これもRSCが昨年ストラトフォードで上演したものを、マーメイド劇場に移していた。この劇場は、ストラトフォードのスワン劇場と同様、長方形に張り出した舞台を五〇〇ほどの客席が三方から取り囲む小劇場である。ベン・ジョンソンはシェイクスピアとほぼ同時代の人で少し後輩になる。この作品は昭和初年に北村喜八によって「十人十色」という題名で翻訳されているが、日本では上演されたことがないようだ。エリザベス朝のバイタリティのある庶民の生活をコメディ調に描いている。舞台の天井には小道具が吊してあり、必要に応じて上げ下げする。梯子を下せば階上と階下の芝居になり、戸口が出れば家の内と戸外の景になるという具合である。役者は客席から登場したり、ギャラリーに消えたりする。羽根をつけた帽子や、ビロードのマントなど古典風の衣装をまとった登場人物は数が多

く、複雑なかかわりあいを理解するのに苦労したが、明るくおおらかで、舞台と客席の一体感が楽しかった。劇場前の道は人通りも車もまばらで、とても劇場の周辺とは思えない。今にも降りだしそうな空の下で、傍を流れるテムズ川の豊かな水も暗く波立っていた。

ミュージカルは、まずオールド・ヴィック劇場の「キス・ミー・ケイト」。オールド・ヴィックは、RSCが永い間本拠としていた所で、シェイクスピアの全作品の上演などで知られ、英国人が「世界で"MOST FAMOUS"な劇場」と自慢する劇場である。(写真上)。「キス・ミー・ケイト」の初演は一九四八年。アメリカで映画化もされている。コール・ポーターの音楽と、ストーリーの下敷になったシェイクスピアの「じゃじゃ馬ならし」が受け入れられたのか、フィナーレの主題歌のコーラスが始まると、自然に客席の手拍子が和していた。コメディ・リリーフのドジなギャングに扮した二人の中年の役者が、最後には歌って踊ってさらってしまったのには感心した。



「キス・ミー・ケイト」オールド・ヴィック劇場



「チェス」プリンス・エドワード劇場

「42nd Street」は、アメリカのミュージカルで、日本でも上演されたお馴染みのもの。イギリスのミュージカルはどうやら歌の方が優勢のようだが、アメリカのものはダンスが主流でテンポの早いタップが鮮やかである。『サンデー・タイムズ』が「アメリカ人でなくては不可能と思われることを、イギリスの歌手やダンサーがうまくやっている」と評していたのが面白かった。この劇場ロイヤル・ドゥルーリー・レインは歴史のある劇場で、「マイ・フェア・レディ」の舞台となったコベント・ガーデンの青物卸市場のすぐ傍にある。卸市場は移転して、建物は庶民的なマーケットになっているが、吹き抜けになった地下広場をのぞくと、若い人たちがひしめきあってバンド演奏を楽しんでいた。

もう一つのミュージカル、プリンス・エドワード劇場の「チェス」は、前の二つに比べて異色の作品である。このロック・ミュージカルは、数年前、ソ連とアメリカのチェスのチャンピオンが世界一を争った実話に、恋を絡ませたもので、『サンデー・タイムズ』は「陳腐で、ありえないストーリーだが、トレヴァー・ナンの達者な演出によって変身させた」と評している。RSCのトレヴァー・ナンは「レ・ミゼラブル」と同様、大掛りな仕掛を駆使している。劇場の入口から、舞台の床、カーテン、すべてチェスの盤面と同じ黒白や赤白の市松模様(写真下)。舞台奥と両袖にある六四個のマルチ・スクリーンが、チェスの盤面の動きを拡大してみせたり、勝敗を報道するテレビニュースの画面になったり、さらには一喜一憂する米ソ両国のファンの表情を写しだすなど、意表をつくダイナミックな仕掛はなかなかのものではあった。

(一九八七・一二・二〇)